

ヴィクターとすてきな発明

作・絵
小原
亜季





まちからはずれた^{みどり}緑^{おか}っぱいの^{うえ}丘の上。

そこには、^{はつめいか}発明家の^すヴィクターが住んでいました。

ヴィクターは^{へや}部屋にこもり、おしゃべりするロボットや
^{そら}空をとべる^{ぼうし}帽子などいろいろなもの^{つく}を作っていました。

そんな^{かれ}彼を^{まち}町の人たちは「^{ひと}かわり者の^{もの}発明家」と

よんでいましたがヴィクターはまったく^き気にしません。

なによりも「^{つく}作ること」が^{かれ}彼の^{たの}楽しみで、

たいせつなことだったのです。

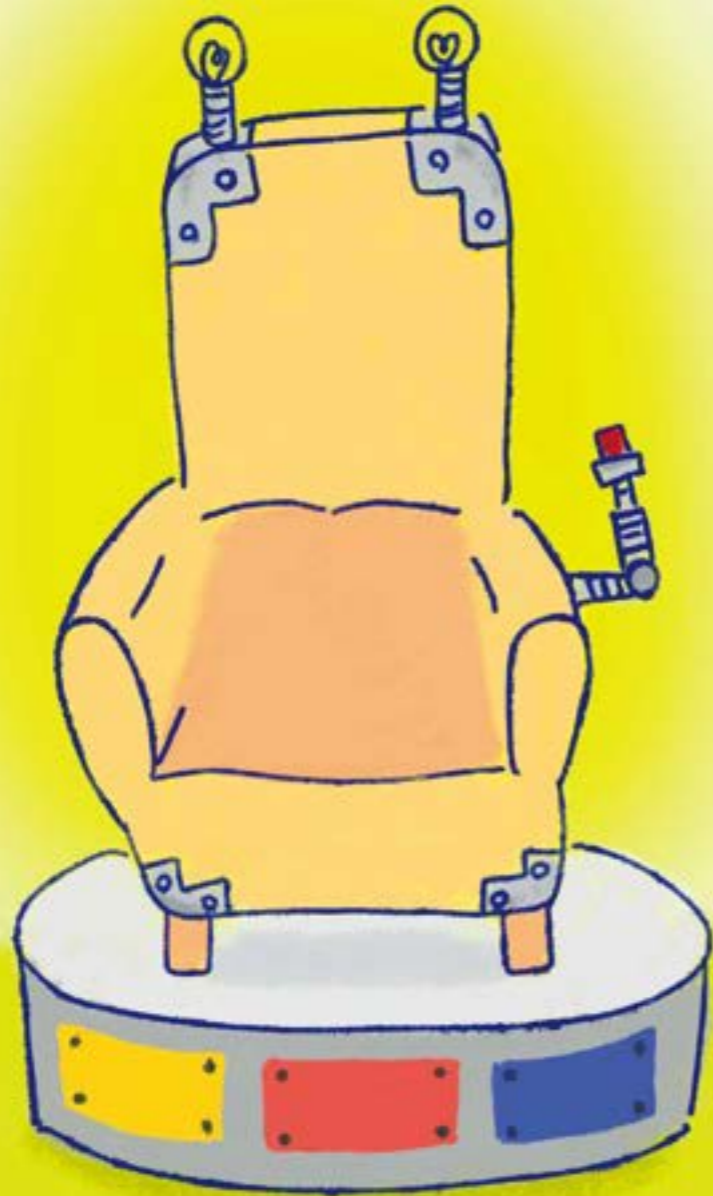


ある日、ヴィクターはまた新しい発明品を思いつき
いきおいよく描きはじめました。



「ここはこうして…いや、こっちのほうがいいかな？」
ヴィクターは形や色、さわりごこち、
ひとつひとつ細かい部分までこだわりながら作りました。





「よし！できたぞ…！これは今^{いま}まででいちばんのできた！」

ヴィクターが作り^{つく}あげたのは、

一人^{ひとり}が座^{すわ}れるくらいのソファでした。



ヴィクターは^{おも}思いました。

「このソファを、^{まち}町の^みみんなに見せたらどうだろう？」

^{じぶん}自分の^{はつめいひん}発明品をだれかに^み見てもらいたい^{おも}と思ったのは、

これが^{はじ}初めてでした。



しかし、ずっと家にこもってだれとも話してこなかった
ヴィクターは町に行くのが怖くなっていました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ…」と、つぶやきながら
ドアの前を行ったりきたり。



それでもヴィクターは^{ゆうき}勇気をだし
ソファを^{だい}台にのせて^{まち}町まで^{はこ}運ぶことにしました。

ヴィクターがついたのは、たくさんのお店がならび
まちでいちばん人があつまる場所でした。





さっそくソファを^み見てもらおうとしましたが

^{きんちょう}緊張してどうすればいいのかわからなくなってしまいました。

そんな^{こま}困っているヴィクターのもとに

^{おんな} ^こ ^{こえ}女の子が声をかけてきました。



「おにいさん、これなーに？」

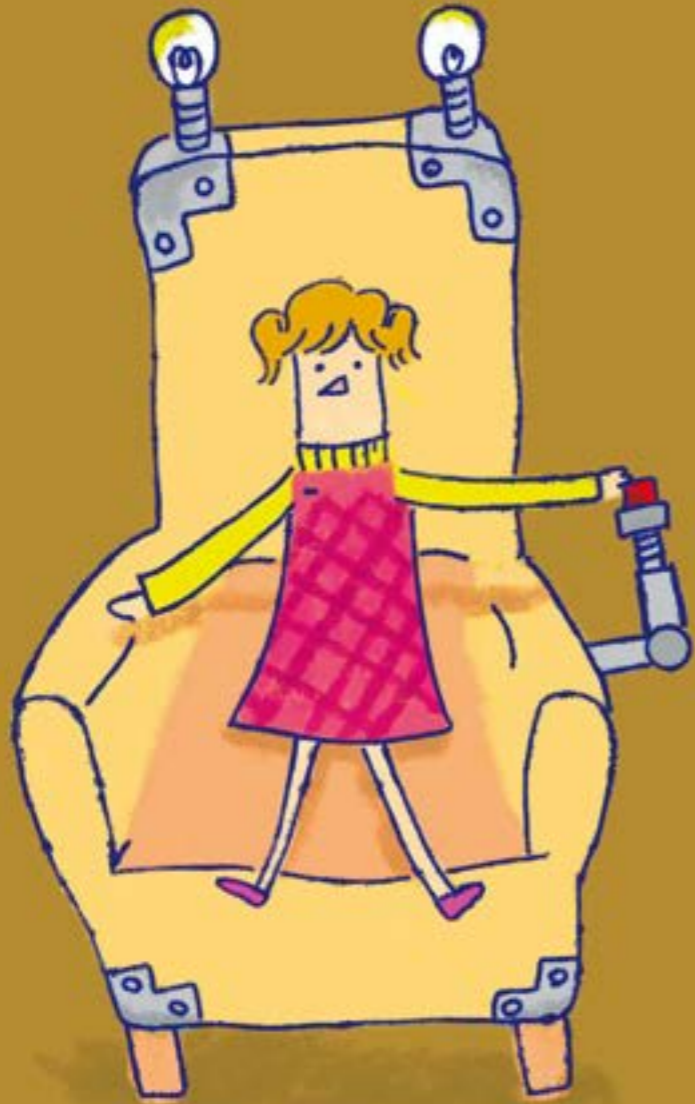
ヴィクターはいきなり^{こえ}声をかけられビックリしましたが
おちついてこたえました。

「これは私が作った^{わたし つく とくべつ}特別なソファさ。

^{すわ}座って、ほしいモノを^{おも}思いうかべながら^{あか}赤いボタンをおすと
そのモノがあらわれるんだよ。」

「わたし、すわってみたい！」と、

^{おんな こ め}女の子は目をかがやかせました。



おんな こ 女の子は、ほしいものを想像しながら
ソファの赤いボタンをおしました。
すると……



ふわっと、やさしい光^{ひかり}が女の子^{おんなこ}をつつみこみ
あつという間^まに着^きていた服^{ふく}がキラキラのドレスに
かわったのです。

「わあ！すごい！！」

女の子^{おんなこ}はドレスのすそをひらひらさせ
くるくるまわりながら喜^{よろこ}びました。



それを見ていた町の人たちが次々とあつまってきました。

はじめは緊張していたヴィクターも

自然に話せるようになっていました。



それから毎日、ヴィクターは広場にソファをもっていき
町の人と楽しくおしゃべりをしながら
たくさんの人に座ってもらいました。



しかし、^き気がつけばヴィクターは

^{あたら}新しい^{はつめいひん}発明品づくりをやめてしまっていました。

みんなが^{えがお}笑顔になる姿^{すがた}を見ているだけで^{しあわ}幸せだったのです。

ある^ひ日、いつものように^{まち}町から^{かえ}帰ってきたヴィクターは

ソファに^{こし}腰かけ、ふとボタンをおしました。

すると、ソファはパッと部屋中に光をはなちました。

「うわ、なんだこれ！？こわれたのか？」

ヴィクターはそう思いましたが

よく見ると、光はこれまでヴィクターが作った
ロボットや作りかけのものたちを照らしていたのです。

「…そうだ。僕は発明家だ。

みんなとおしゃべりするのは楽しいけど

おなじ発明品をもって町に行くだけの毎日。

僕はだいすきな発明品を作っていなかった…。」

ヴィクターはわすれていた「作る楽しさ」を思い出し、

机にむかいました。





ヴィクターは朝までひたすら作りしました。

町の人たちと話そうちに、

みんながどんなことで困っているのかが分かり

今まで以上にたくさんのアイデアが浮かんでいきます。

そして、光をはなったソファもそばで応援するかのよう
に
しずかにかがやいていました。



しばらくして、ヴィクターは自分のお店をひらきました。
その名も「ヴィクターのアイデア工房」。

ヴィクターは町の人たちとおしゃべりしながら
わくわくするような発明品を作りつづけました。

そして、ヴィクターは「かわり者の発明家」から

「町いちばんの発明家」とよばれるようになっていました。



NOYES
SOFA100%

2025年2月22日発行

著者 小原 亜季

発行者 株式会社NOYES

第10回 NOYES絵本コンクール 大賞作品